

土木女子、
はじめました。



川田建設株式会社
名古屋支店 工事部 工事課
あいち あや か
愛知 郁花

橋をつくる仕事の魅力

1人がどれだけ頑張っても橋は完成しません。

はじめて従事した現場で、その橋の建設に携わるたくさんの方の「安全に品質の良いものをつくりたい」という思いの詰まった橋を、無事に発注者へ引き渡した時の達成感は、今まで味わったことのないものでした。1人では絶対にできない大きな仕事、その一端を担えていることが最大の魅力だと思います。また、地元の方々に「できるだけ便利になるから頑張つてね」「完成が楽しみ」などと声をかけていただくことがあります。自身の仕事が人の役に立てることを実感しやすいことも魅力のひとつだと思います。

土木と女性

私が所属する名古屋支店では、施工管理として現場に常勤する女性は私ひとりです。そのことを心細く感じていた

ところ、他社の女性技術者の方を紹介していただく機会に恵まれました。その方に誘われて、女性の土木技術者同士が情報交換できる「土木技術者女性の会」に入会しました。会では、今まで出会うことのできなかった方々と出会いました。私の相談にも親身になってくださり、こんな女性技術者になりたいと思う方々に出会うことができました。「私にはロールモデルがない」そんな問題が解決され、さらに土木を好きになるきっかけをいただきました。

新しい取り組み

大学では心理学を学んでいました。そんな私が橋をつくる会社にご縁があり、土木の世界にいます。学生時代には想像もつかない仕事をしており、畑違いでわからないことだらけのため、落ち込むことも多々あります。そんなとき上司に「愛知さんの思う道を貫けるよう、負けないよう、努力しないとね」と助言をいただきました。そこでまず、メンタルを強くしようと筋トレを始めました。心理学では、運動により心身が健康になることが証明されています。中でも筋トレは、メンタルに良い影響を与えてくれるさまざまな脳内ホルモンが分泌されることわかっていきます。そのため、週に2、3回は仕事が終わった後にパーソナルトレーニングジムへ通っています。

また、筋トレと同時に「あきんぼ」も始めました。毎朝30分早く起きて、好きな音楽を聴きながら散歩をしています。いつも車で通る見慣れた道でも違う景色になり、発見や気づきがあります。現在従事している現場で「みんなの橋」と題して保育園児に橋の塗り絵をしてもらい、塗り絵をつなげてひとつの橋を形作り、現場に掲示する企画を行いました。これは、「あきんぼ」で思いつき、実現させた企画です。運動することにより、頭の中をスッキリと整理することができます。皆さんも何かに行き詰った時はぜひ、体を動かしてみてください。

最後に

「最も難しいことは『やる』と決めること。あとはひたすらにやるだけ」。これは1932年に女性として世界で初めて大西洋単独飛行を成功させたアメリカの飛行士、アメリア・イアハートの言葉です。アメリアは女性でも『やる』と決めて懸命に学び、努力すればどんなことも成し遂げることができると世界に証明しました。同時に、同じ志を持つ女性を支援する活動もしていました。私も土木女子を始めたからには、これからの皆さんの困難があると思います。アメリカの言葉を胸に、自身を奮い立たせ、土木の仕事に邁進していきたいと思えます。



▲ みんなの橋



▲ 現在の現場



▲ 初めての現場(架設状況)

#006 仕事場拝見

PCと私



昭和コンクリート工業株式会社
技術工事本部 工事部 中部工事課

こじま ひろのり
児島 弘憲

物造りがしたくて

私は、幼い時から物造りが好きで、自分の未来を考える際に、将来に残る大きな構造物が造れる土木工事に従事したいと思い大学で土木工学を専攻しました。知識を広めていく中で、自分の性格を鑑み、現場仕事が合っていると感じ、現場監督の職を希望するようになりました。授業の中で、プレストレスを導入したコンクリート製の板が展示され、実際に乗ってみた時、割れないコンクリートって凄いと衝撃を受けたのが、プレストレストコンクリートとの出会いです。将来に残る！かつプレストレストコンクリート、また現場仕事という条件を満足したのが、プレストレストコンクリート橋梁工事でした。

現場での仕事

私は、入社して1年目は設計で研

修し2年目から工事課に配属されました。最初の工事現場は山形県尾花沢市で、自分の物造りがスタートしました。最初の頃は、現場での立ち回りや、資機材の名称が分からず右往左往していました。現場所長をはじめとする先輩方の指導の下、少しずつですが仕事を覚えていきました。仕事に慣れ始めた5年目には、岐阜県飛騨市内の橋梁現場に配属され、

いままで施工したことない長大橋の施工管理を行いました。ここは、サイクル施工であったため、日々の進捗管理が重要で、職長や作業員と打ち合わせをしながら現場施工を進めていく中、徐々に仕事を任せられるようになってきました。この現場で一番苦労したことは、豪雪地帯における厳冬期でのコンクリート品質管理です。外気温や雪・氷は、硬化前のコンクリートには大敵です。全天候型に対応した移動作業車を用いて張出施工で工事を進捗させ、ジェットヒーターによる加温による品質低下防止など多岐にわたる品質管理を行った結果、無事架橋できました。橋梁全体が繋がった状態を、遠方から側面を見渡した際、言葉では言い表せないくらい嬉しかったことを覚えています。逆に開通し通行したときは、短く感じてしまい、ちょっとガツカリし

たのも思い出です。現在は、愛知県豊川市で23号バイパスにおける橋梁工事に従事しています。自宅からも近いことから将来通過することもあるだろうと考えていますが、その時は子どもに「パパの造った橋だ」と自慢したいと思います。

仕事以外の楽しみ

今までに、北は青森県、南は福岡県までの現場を行き来しています。もちろん自宅に帰ることもできない現場もありました。しかし、楽しみもあります。それは、その土地の名物料理を堪能することです。秋田での比内地鶏・仙台の牛タン・静岡のマグロ・福岡のもつ鍋など、一度はテレビなどで見たことある食べ物や料理を食すこと！は、知らない土地に触れた自分が見つけた楽しみであります。

最後に

社会人になり、橋梁の仕事に関わって13年が経過しました。いろいろなプレストレストコンクリート橋を経験してきましたが、まだ施工したことない工法もあることから、日々チャレンジしながら、業務に取り組んでいきたいと思っています。



▲ 現場作業状況



▲ 23号バイパス架設状況



▲ 岐阜県飛騨市施工風景

復興の地で



株式会社IHIインフラ建設
東北支店 橋梁営業グループ

もり こうせい
森 紘生

合縁奇縁

私は元々建設業界に興味があったわけではなく、高邁な志があったわけでもありません。ふらっと立ち寄った合同説明会のブースにて『橋を架ける』スケールの大きさに惹かれ、物事を根幹から支える仕事に就きたいと思ったことがきっかけでした。学生時代は法学部で金商法を専攻していたため、なんとなく潰しが効くだろうという漠然とした理由から業界を絞らずに面接を受けていました。こんな私ですが、ご縁あって現在に至ります。

初配属地は東北

入社後、私は東北支店橋梁営業グループ(仙台)に配属され、現在までの約6年間、東北6県を担当エリアとして日々受注活動に従事しています。美味しい日本酒(特に伯楽生)と美味しいごはん、各地の名湯(特に蔵王と鳴子温泉)や紅葉(特に栗駒山)に心と体が癒されます。

橋梁営業として

主な業務は、潜在案件の調査や見積、入札業務に係る積算、受注工事の設計変更対応などそのほか多岐にわたります。文系出身のため、専門用語やミリ単位で表記される図面に目や耳が慣れず、『自分にこの仕事が終わるのか』と不安になりながらも早く覚えて業績に貢献したい一心で必死に食らいつく日々でした。入札業務では先輩方や上司に大変な苦勞をかけたが、お陰様で少しずつ自信を持てるようになりました。

主担当として

初めて担当現場を持ったのが宮城県発注の雄勝1号橋上部工事(石巻市)でした。橋梁形式はPC5径間連続箱桁橋(L=200m, W=10.5m)で架設工法はトラス梁特殊支保を使用した固定支保工。現在、雄勝復興道路として供用されています。雄勝地区は硯の名産地であり、原料となる硯石が一带に露出しています。

ICTに関する取組みとして、工事着手前に3Dスキャンを用いた測量により点群データを取得し、構造物と支保工の3Dモデルを融合させることで現場の3Dモデルを構築したものを施工シミュレーションに活用して手戻りを防止するなどさまざまな工夫がなされています。

設計変更対応では大変苦勞しましたが、竣工の際は現場の皆さんと喜びを分かち合い、安堵感と言葉にできない達成感が自信となりました。また、机上だけでなく、実際に現場を見て積算イメージを立てる大切さを実感し、実際にかかる材料費や人工、得意・不得意工種の把握などコスト意識も身につきました。

画面越しに見た被災地

震災当時、九州が地元の私はまだ高校1年生でした。画面越しに写る凄惨な光景を目の当たりにし、心を痛めたことを思い出します。当時は想像もつきませんでした。震災から10年目となる節目に開通した『復興道路』に、道路関係者の一員として携われたことは大きな誇りと喜びを感じると共に、公共工事に対する世間からの関心の高さを肌で感じました。

道路に携わる一員として、津波で全てを失った『町』に道路が繋がり、活気溢れる『街』として再生していく過程は感慨深く、そこには地元住民や道路関係者など様々な人達の思いが詰まっていることを痛感させられます。地元に戻省した際には、被災地域の話を聞かれることがあるため、自らの体験を通して伝えるようにしています。微力ではありますが、橋梁インフラを通して人々の思いを架け、各地区の復興や社会貢献の一翼を担うことができれば幸いです。



▲ 栗駒山の紅葉(宮城県栗原市)



▲ MRを活用した干渉チェック(雄勝1号橋)



▲ 架設中(雄勝1号橋)